

## 「木の香る空間デザイン検討会（第2回）」議事録

日時 : 平成24年3月23日(金) 15時00分～17時00分  
場所 : 小田原市いこいの森 交流体験センター きつつき  
出席者 : 委員 : 後藤会長、牛山副会長、杉本委員、池村委員、小高委員  
          : アドバイザー : 平井アドバイザー、堀井アドバイザー、河合アドバイザー、  
                          辻村アドバイザー、岩越アドバイザー  
          : 行政オブザーバー : 松本建築課長  
          : 事務局 : 長谷川経済部副部長、永井経済部管理監、穂坂農政課長、相田係長、  
                          倉本主任、大島主事補

### 1. 議事

- (1) 「おだわら森林・林業・木材産業再生協議会」からの提言について
- (2) 今後の木材利用拡大に向けた考え方について

⇒今回、無尽蔵プロジェクトの環境エコシティーから岩越松男氏、辻村農園・辻村山林代表の辻村百樹氏をアドバイザーに迎えた。またこの会議は市民の傍聴も可能な開かれた会議とさせていただいた。

### 2. 検討会における主な意見

#### ○小田原産木材の利用

- ・ 前回の検討会で出た「コラボレーションの話」を参考に、林青会と小田原箱根伝統寄木協同組合に協力を仰ぎ、ミカン箱を作成した事を説明
- ・ 木はがきを実際作成しているが、実際にやってみると非常に厳しいと言うのが現実である。1,000枚を作成したが、小田原産木材の数が少ないということもあり、仮に1万枚などの発注がきたら間に合わないと思う。間伐材では節なども入っているため製材がやりにくい。生産性を考えるなら、無節の木を使った方が良い。注枚数が多くなるほど、苦しい状況になってしまう。
- ・ いろいろなアイデアが出てそれを実行に移さなければ意味はない。売れば流れができる。事業化できるものかどうかを厳しく判断し、長いスパンで考えなければならない。真剣にやるなら、誤魔化しがあってはいけない。
- ・ 市民に見せる事により、木という選択肢もあるという、きっかけになっているように感じている。
- ・ 市民に見せるのは重要である。しかし取っかかりになるだけでは今は何も変わらない
- ・ 素人意見だが、木はがきには節があったほうが味があっていいのでは無いかと思う。また、このはがき1枚でどのくらいの森林が救われるか等、具体的な数字を書いた方が良い。興味のある人は、とことん知りたいと思うのが今の時代である。
- ・ ミカン箱はこのような形ではなく昔らしいものが良いのではないか。もっと汎用性があり、産業とリンクさせて使い勝手のいい物をコストをかけずにやって欲しい。キット化する等、家で子供と父親がDIYで楽しく作業できるような物だと良い。埼玉県滝川町に全部内装を木質化した施設がある。ライフスタイルの中に木が関わっていることを自覚させる仕掛けが良いと思う。
- ・ 木を切っても売れないのでは意味がない。市内にも製材所がいくつか残っているのに、最終の出口となる消費者まで到達しておらず、もったいないと思う。小田原にある加工技術をどう結びつけるかがポイントである。小田原材として売るルートを確保し、それをシステム化していく必要がある。新しく基幹となるセンターなどに投資をして作るのではなく、今ある資源・設備等を有効活用しなくてはならないし、品質管理も検討すべき課題である。このような検討会は全国のいたるところで開催されている。重要なのは小田原らしさである。近いうちに地震が起

きると言われている中、小田原市で準備をする中で、仮設住宅を木で建てられるのか、という検討をしっかりとやっていく必要があり、準備にも時間がかかると思う。

木育も全国で行われている。重要なことであるのは間違いないが、少し木を触ってもらえてよしとするのではなく、将来家を建てる時に木造にする決断をさせるような木育が必要である。

- ・木だけでは小田原らしさは追求できないと思う。アウトプットを何にするのか、を検討し、木材の利用だけではなく、まちづくりなどを考えても、小田原らしい1つのコンセプトが必要である。小田原らしさとはなにかを考えると、このミカン箱は付加価値が付いており魅力的に見える。このような箱を個別オーダーで作ってくれる店は少ない。木を主役として使うのではなく脇役として考えればおもしろいし、それが小田原らしさにつながるのではないか。例えば木のおもちゃを作るのではなくて、部品を作り子供に作業させながらおもちゃを完成させる。そうすると主役は子供であり、木は脇役となる。何でも木でできるから、木を使うのではなく、1つのコンセプトに基づいて、アウトプットを想像しながらデザインをコントロールしてやって欲しい。
- ・このきつつきホールを見て、サマースクール等をやればおもしろいのではないかと感じた。ワークショップの店長を1年半務めたが、ワークショップは儲からないものである。店長の給与が1万円/日、パートさんの給与を3,000円/日とし3人雇い、雑費が6,000円かかるとすると、1日で25,000円の経費がかかる。講座1回を1,000円/人として考えると、25人呼んでやっとペイできるが、30人以上を呼ぶというのは現実的でない。しかし、集客がなくてもブランディングや好感度の面では、たとえ利益がでなくても開催する意味はある。要は何をもって評価をするか、何を目的に事業をやるか、だと思う。収益は？効果は？本当にその効果が必要なのか？等よく検討する必要がある。  
しかしお金に変えられない経験を子供にさせてあげられるというのはとても充実感がある。店長をやっている間にその企業のファンになってくれる人がいた。そのおかげで売り上げが激的に上がるという訳ではないが「幸福度」は高くなる。
- ・葉書や建物はどこでもやっている。小田原の作家さん達が使っているのも小田原材とは限らない。また、小田原らしさ、景観づくりにも活用されていないように感じる。例えば、子育て支援センターでも木のおもちゃは導入されていないのだから、出口のコーディネートができていない、という事だと思う。
- ・小田原に木の看板は似合うと思うが、街かど博物館のような施設の看板が非木製である。木の看板は年月が経てば趣が出て、老舗感も出る。例えば森林文化アカデミーという学校がある。小田原市の政策総合研究所のような小田原の木を考える研究所を作ってみても面白いと思う。やはり小田原の木を見せる場所を作りたいし、そこでは、製材したような材料ばかりでなく、太いままの木を見せるもの1つのアイデアだと思う。
- ・2年前にフォレストアドベンチャーを作った。これは、木材が売れない中で、森林の管理費用を捻出するため、という側面もあったが、都会の人は木の製品をみても、森林からの繋がりが想像できない、という事を感じていたというのが大きな理由である。冬になると子供たちは薪のストーブに興味を抱く。都会では木を燃やすような事はないため、枝が太いと燃えにくい事など、新しい発見があるようだ。一昔前は街には製材所があり、木が身近に感じられた。今は木造の家と言っても、上棟後すぐに周りにネットが張られてしまい、周りから見れば、木造の家を建てている事も分からない。小田原は都会から西に走って初めて見える森がある。そこに可能性があるのではないか。間伐材のチップを作ってみる、といった自然に手を加えない物を販売してはどうか。都会から車で来て、そのまま買って帰れるもの良いと思うが、販売しているのが東急ハンズで買えるような物では意味がない。倉敷のように名前を聞いただけで、街並みのデザインが想像できるようになるのが理想だと思う。
- ・生産性はデザインと収益性に直結する。まず何故、木なのかを整理する必要があると思う。私はゼロエミッションとサステナブルではないかと考えている。製品は最後の処理まで考えて作っていく必要がある。木製品は石油製品と比べたらコストでは厳しいと思う。しかし、処分費まで考えれば、木は安いものである、と売っていけば良いと思う。今回の震災の最大の問題

はゴミである。木造の瓦礫であれば焼却してしまうという選択肢もある。また、木の葉書のサイズを大きくして、表は葉書であるが、裏にすれば小さなお盆になる、といったような視点を変える事で付加価値の高いものが出来るという考え方もある。

- ・小田原在住であるが、自然に囲まれて生活をしているという実感はない。そういう視点で見えないせいもあるが、見せ方を工夫していく必要があるとも感じる。自然に役立つと言われても、学生の立場から言えば、販売価格が高くては、手も出ないし購入意欲も沸かない。
- ・皆さんの意見をまとめると、全体をカバーするコンセプトが大切だし、それを作らなければならない。最初に事業化の話をしたが、事業の中にはブランドや教育への投資も必要であろう。何の目的のためにやる事業なのか、そういう整理が必要である。既存の市の事業・資源を組み合わせる実現できるか検討する必要がある。アイデア出しで終わらない取組にしていきたい。岐阜県の白川村はアイデア市町村で、日本で初めて水売り出した村である。元手ゼロから出した成果として見習うべきところである。芝浦工業大学の先生から聞いた話であるが、北欧での取り組みとして、街のデザインの統一の為に、市役所や出張所に同じペンキを置くというものがあるそうだ。市民はそのペンキを自由に持って帰る事が出来るようにする事で、そのペンキを使う事で、結果、同じような外観の建物が並ぶことになった、という例もある。
- ・高知県の大方町の砂浜美術館が有名な例としてある。ホームページで確認できるが、コンセプトの文章を最初に作って共有化したものである。木の持っている何が小田原らしさのコンセプトにつながるのか、小田原は木を使うという姿勢を入れた皆が共有できるコンセプトを作る必要がある。

#### まとめ

委員の方の話を聞いていて、難しい課題であるというのを痛感している。事業は実際にやってみて悪さが分かる部分がある。木葉書をやってみて議論になったのは良かったと感じている。小田原らしさは歴史・文化がキーワードであると思うが、来年度以降の検討会の進め方も含め、色々検討させていただく。

以上